

わがまち・ふるさと再発見!

98 金子市之丞 1  
身近な史跡めぐり

田村哲三



本紙、平成28年7月14日発行の第38話で、紹介した金子市之丞については、地元の伝説の他に講談と歌舞伎があります。

講談は幕末の頃、講釈師2代目松林伯円が創作したもので題名は「天保六花撰」。5人の悪党と1人の花魁の物語です。講談のモデルとなった人物は、吉野家文書にある「流山無宿金子屋半七伴市」

盗賊に付・・・(文化10年12月)の金市と思われ、金市の父、半七は酒造業を営んでいました。

以下、金子市之丞の場のあらすじを紹介します。



師匠田田神読む花撰天保講談

時は天保時代。市之丞は流山の醤油醸造業金子屋に生まれ、姉が1人いました。子どもの頃に父が亡くなり、家も傾き、13歳の時、恩ある醤油問屋から三百両を強請り取ったことから母親に勘当されてしまいます。その金を元手に博徒の道に入った市之丞は、腕と度胸でめきめきと売り出し、ピン小僧の金市と呼ばれました。19歳の頃、親分の急死で、1番の子分だった金市が跡目を継ぎ、子分600人を抱える大親分となります。しかし法度の博徒ですから役人に追われ、役人の片腕を切り落としたことから凶状持ちとな



像大魔王・閻魔堂

り、剣の使い手でもあった金市は、身を隠すために浅草鳥越で道場主となります。

一方、吉原大口楼の花魁三千歳は、恋仲の片岡直次郎(直待)がたびたび金の無心をするので愛想が尽きていました。その頃、三千歳のもとに通う金市の気風に惚れ、三千歳は金市に乗り換えてしまいます。怒った直待は、役人に金市の凶状持ちを告げ、金市は捕らわれます。

伝馬町の牢獄から取り調べの奉行所に行く途中、子分の丑松の手助けでモッコ抜けを計画。金市は小用のため公衆トイレ(街角に4斗樽を埋め板囲いしたもの)に寄り、暗闇の中、

丑松は酔った侍姿で現れると、金市に刀を取らせ、その刀で縄目を切り逃走します。

余談ですが、病気の罪人は「おだて」という籠のモッコに乗っていくことから「おだてに乗るな」という言葉が生まれました。

モッコ抜けをした金市は、流山の母に会いに行く途中に寄った風呂屋で、按摩の話立ち聞きし、三千歳は金市が捕らわれたことで、心労のあまり病に伏し、入谷の大口楼の寮

で静養していることを知ります。按摩の後を追った金市は三千歳と会い、花魁の真の愛を知ることになります。そして流山に向かう途中、金市は役人に見つかり、母に会う猶予を買い、実家に向かいますが、母は7日前にすでに亡くなっていました。姉は勘当されている金市を家に入れることはありませんでした。

自棄になった金市は、役人との約束を反故にして関西に向かってしまいます。

金市は、三重県の桑名では心中しようとする若い男女を助け、京都では宿の女中に因縁を付ける江戸から来た男を仲裁します。その男から江戸の様子を聞くと、江戸では、すでに河内山宗俊や片岡直次郎、暗闇の丑松が捕らわれ処刑されたこと聞き、

ここらが年貢の納め時と悟った金市は意を決し、流山に舞い戻り、かつて母親に会うまでと約束した役人、万屋甚兵衛に手柄を立てさせようと甚兵衛を訪ねます。

甚兵衛の子分たちは、金市を取り囲むが、金市が剣の使い手であることを知っているため、誰一人前には出ません。金市は、いつか猶予を貰った約束、少し長くなったが返しに来た。てめいのお縄を頂戴して送られようじゃないか」と刀を投げ

出し、お縄となりました。

わがまち・ふるさと再発見!

97 日光東往還道と大行列 2  
身近な史跡めぐり

田村哲三



今回は安永5年(1776)、実際に往還道を通った青山下野守の日記から再現してみます。

「4月9日、江戸城を出て千住宿で昼食をとり、中川を船で渡る。渡船場の船は5艘なので、9艘をよそから借りて14艘で渡った」とあります。共侍が1200人、人足、駄馬を加えると3000人ぐらになりますから、14艘でも何度か往復したことでしょう。また、「鉄砲58挺を持ってお役目についた。江戸川の渡しは15艘で渡った。これも船が不足していたので、水戸様の船を借用した。1日目はここで終わり松戸宿に宿泊。人数1223人とあり、

当時、水戸藩は自前の船で渡船していたことや、江戸城を出た後に金町の関所で鉄砲改め(免許可書と照会)があり、將軍警護の大名でも、鉄砲は厳しく管理されていたことが伺えます。

4月10日、寅下の刻(午前4時頃)に出発し、小金宿に休憩。ここに田中藩の藤心代官所から挨拶に来ています。小金宿を出発し、水戸街道から分かれた東往還道を進みます。往還道は小金牧の中を通りま

すから、前号で書いたように行列を一目見ようと近在の村人が見物に集まりました。小金牧を出た東深井の



Wクラク道の手前の百姓弥右衛門(小倉家)宅で休憩、即刻御立。ここには田中藩船戸代官らが挨拶に来て

います。昼食は野田市の山崎宿。下野守他要人は福寿院というお寺、他の共侍は1200人もいますから、47軒の民家に分散しています。ここにも関宿藩の要人が挨拶に来て

いますので、下野守は相当の実力者であったようです。山崎宿には本陣がないため、このような時は名主宅が本陣になります。この時は別の大名が本陣に泊まるため、寺院が昼食所として当てられました。この後、青山下野守一行は野田市の中里宿を経て、関宿に宿泊。翌日根川を渡船。以下省略します。

通常、日光東往還道を通る大名は多くありませんが、日光社参の下見や宿泊地、休憩地、助郷(臨時の荷役)の指令や手配など、どで老中や担当大名が通りました。

この街道がいつできたか分かっていません。中世に多功城、結城城、関宿城、江戸初期に山崎城があったので深井までの道はあったと思います。

小金牧の中の道がいつできたか。おそらく日光東照宮が完成する寛永13年(1636)頃と思われる。國部藩行列(出典/南丹市文化博物館)

小金牧を出た東深井の

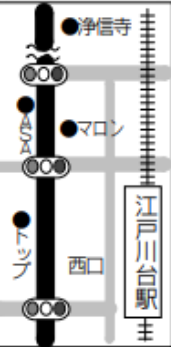
小金牧の中



わがまち・ふるさと再発見!

96 日光東往還道と  
大名行列1

業内後 田村哲三



江戸時代、市内には日光東往還道と呼ばれる街道が通っていました。幕府が作成した五街道分間絵図では「関宿通多功道」と記されています。

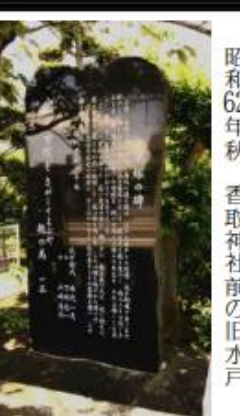


この街道を地元では日光街道と呼び、旧水戸街道から分かれ、旧日光街道で合流する脇街道で、分岐点は南柏駅近くにあるバス停新木戸付近です。ここから豊四季方面に向かい、東武野田線に沿うように北上し、流山おおたかの森駅、初石駅・江戸川台駅・運河駅の近くを通り、野田、関宿、結城を経て、栃木県の駒室で旧日光街道に合流します。しかし、これは現在の解釈で、江戸時代は宿場を起点にいましたから、小金宿から雀宮宿までの20里34町(約82km)を日光東往還道としていました。また、街道は小金牧の中を通っていたため、野馬が逃げないように、牧を横切る諏訪道や出口の東深井(浄信寺手前)、村々からの出入り口にも木戸がありました。

この街道が日光街道と呼ばれるのは、ただ日光にいたる道と言うだけではなく、実際に多くの大名行列が日光を目指したからです。日光東照宮には徳川家康が祀られており、家康の命日の4月17日には將軍がお参りしました。これを日光社参と言います。

社参は10万人規模の行列で日光を往復するため、警護の方も大がかりとなりました。日光周辺の警護隊は先乗りして警備をするため、その任に当たる大名が東往還道を通りました。天保14年(1843)の社参では13の大名と高家が通りましたが、大名同士ががち合わなように日時が決まら

れ、4 5日に分かれていました。それでも、1大名の人数は1000人前後で、約1万人。これに荷運の馬と人足が同数近くいたと思われるから、壮大な行列でした。松ヶ崎(柏市)の組頭長妻忠治は日記に「市野谷の新木戸のあたりには茶屋が30軒ほど並び、大勢の兎物客が大名行列を見に来ていた。街道には1日中馬子唄が響いていて、東海道にも勝る賑わいであった」と書いています。1日に3大名として、1大名1000人、2列、馬1列、間隔3m、大名間の時間差1時間とすると、行列の長さは約25kmになります。これは松戸宿から山崎宿(野田市)の距離と同じです。



平成9年5月、長野県信濃町と姉妹都市の盟約を結んだ記念に、同町から句碑が寄贈されました。句は文化10年(1813)51歳の作品とされ、「七番日記」、「おらが春」に掲載。文化9年、双樹亡き後に一茶は帰郷。ふるさとの山を詠んだとされています。山を見るのは蛙が一茶か。



文化11年の「随齋筆記」、大正9年の秋元梧楼が発行した「三愚集」にも掲載。一茶が真似たか偶然か。近くに山上憶良の歌碑もあります。銀も金も五も何せむに まされる宝子しかめやも (山上憶良)



昭和62年秋、香取神社前の旧水戸下陰をさがしてよぶや親の馬 (一茶)

半庵は、一茶を世に出した後援者とされる馬橋の大川立砂の子。父の死後、柘日庵と名乗り、父の後を継ぎ、後援者の一人となりました。天保2年(1831)、弟子たちにより句碑建立。同寺を拠点に指導していたと思われ、双樹亡き後、流山の俳句界を受け継いだでしょう。



千国に光ますます供養塔 (和松) 早口しむやさるの手 紫の供養塔 (紫垂)

95 句碑めぐり2

街道にあった1里塚の記念碑として、氏子により句碑建立。句碑に刻まれた句は文化7年6月14日に文化句帳に記されたもので、「13日晴、双樹留守なれど流山治。14日晴、小金原入守谷西林寺入」とあることから、旧水戸街道ではなく諏訪道の小金原だったことが分かります。

号を与えられた、中出身の昭和の俳人。昭和32年に俳句誌「黄楊」を主宰し、流山俳句協会初代会長に就任。俳句活動を展開しました。碑裏面には市内127名、市外71名、合計198人の名があり活動の大きさが分かります。





わがまち・ふるさと再発見!  
 身近な史跡めぐり  
 94 句碑めぐり1

案内役 田村哲三



①一茶双樹記念館  
 夕月や流りのきりぎりす小林一茶



文化元年(1804)9月2日、双樹邸で詠んだもの。碑は平成7年4月、開館の際、黒姫山の石を使用し、市

が建立。筆は一茶の文化句帳より。句帳には「8月27日雨の中流山入る。28日も雨、29日、30日も雨で利根(江戸川)に出水。9月1日晴、加村出水2尺。2日も晴れるが、利根川の増水激しく里人手に汗を握り見守る」と書かれています。句からは洪水後の静かな情景が浮かびますが、実際は月も2日月で顔を出さず、人々は洪水の心配をし、全く違った情景になりますね。キリギリスはコオロギのことと言われています。

②赤城神社  
 越後節歌に聞えて秋の雨(一茶)

文化元年(1804)8月28日、双樹邸で詠んだもの。碑は昭和45年、文化の日に流山俳句関係者有志により建立。

秋元本家の蔵では越後杜氏たちが、お国訛りの歌を歌いながら、酒造りの仕事をしている情景ですが、越後と信州との国境、柏原村(現・信濃町)の生まれの一茶には、越後節が心に沁みただのかもしれない。

③光明院  
 塵掃てそして星塵と時鳥(秋元双樹)

句は随斎(夏目成美)がまとめた俳人句集を、文化8年に一茶が『随斎筆記』から抄録し選出。碑は平成9年、市制30年を記念し建立。筆は当時、信濃町一茶記念館名誉館長の清水西、同町鳥居川の石を使用。大尽のご隠居らしい風情溢れる句。朝飯も炊ぬうちから開古鳥(双樹)同筆記には右の句もあります。豆引や時鳥は月夜に任す也(双樹)煙らぬ家もうちを暮くして(一茶)

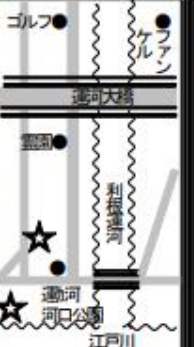
文化元年長月(9月)朔日、双樹邸で詠んだ連句。碑は昭和53年10月、第2回双樹忌に建立。筆は双樹の『俳諧草稿』からとりました。夕暮れの大豆収穫作業情景を詠んだ句ですが、この日、加村は出水が2尺もあり、新月で月は見えず、現実とは別世界を詠んでいます。松穂のからからと秋氣澄みにけり(松本翠影)

翠影は本名は半次郎。明治24年、流山の材木商に生まれ、秋元西汀らの俳句活動に参加後、明治44年に家業をたまたみ上京。俳句誌「新緑」(ましろ)を編集発行し、昭和14年「みどり」を主宰しました。

秋の冷気が肌にしみいるような句。上野公園内清水観音堂敷地に、翠影の名句とされる左の句碑があります。

わがまち・ふるさと再発見!  
 身近な史跡めぐり  
 93 六社神社と  
 深井新田の渡し跡

案内役 田村哲三



江戸川の堤防を野田に向かい、利根運河の河口から約500m進むと堤防上に、深井新田の渡し跡の標柱があります。ここには江戸中期から昭和初期まで渡し場があったとされています。

享保13年(1728)、それまで吉川市域を流れていた太日川(現・江戸川)の付け替え改修が行なわれ、川の流れが変わりました。新しくできた川により、深井新田村は2つに分かれ、田畑や家に行くには舟で渡らねばなりませんでした。明治28年、江戸川の西側は埼玉県になり、お互い独立した村になりましたが、渡しは継続。人的交流や成田詣での人々に利用されました。

六社神社

六社神社の創建は天正4年(1576)、祭神は水速男命、水速女命、稲倉魂命、高禰命、素戔嗚命、火靈命の六神です。この時代は15年ほど続いた小田原北条氏と関宿梁田氏の対立も終わり(天正2年)、北条方だ

た深井の住民にも平和が訪れた時期でした。住民は槍を鎌に変え、新田を開発。合わせて鎮守の社を祀ったのでしよう。六社神社は対面の江戸川の堤防下にもあります。分村されたため、両岸に二つの六社神社を祀ったのです。



境内左手にある大杉神社は利根運河の江戸川口の南にありましたが、運河の工事で現在の場所に移されました。本宮は茨城県稲敷市にあり、古くから水運の守り神とされていて、同神社の中にも大小2つの舟の形の神輿があります。この舟形神輿は江戸川の渡船や舟運に関わりのある人々の、水神に対する崇拜と水運の安全を願って奉納されました。境内左右には明治44年の待道大権現塔、天保9年の猿田彦大

神他10基の庚申塔、5基の十九夜塔、水神塔、43尊と30尊の力石などがあります。力石は船頭さんの力比べの石です。注目すべきは市内で最も新しいとされる庚申塔で、昭和9年7月吉日、妙法道分庚申、大崎白石栄太郎、37歳と刻まれており、白石氏による死者への追善供養のようです。昭和の時代でも庚申信仰が残っていた証とも言えます。待道神は安産祈願の神ですが、明治の時代でも安産は神頼みでした。